



大図研関西3地域グループ合同例会

終了しました

～海外と日本の動向から見直す～

オープンアクセス・オープンサイエンスと私の関係

現在、オープンアクセスは日本を含む各国の政策で提唱されています。オープンアクセスは学術情報の流通全体に関わる複雑なテーマであり、その担い手として大学図書館でも主体的に取り組むことが求められています。そこで、今回の合同例会では、現在のオープンサイエンスを含めた国内外の動向を考察し、議論する機会といたします。

参加者のみなさまが現場でのヒントを得、また学術情報流通における今後の大学図書館の役割を考える契機となれば幸いです。

会 場 : 関西学院大学大阪梅田キャンパス 1004 教室 (梅田アプローズタワー10 階)
http://www.kwansei.ac.jp/kg_hub/

日 時 : 2017 年 3 月 4 日 (土) 14:00-17:30

内 容 :

報告 (坂本拓氏、花崎佳代子氏、加川みどり氏、土出郁子氏)
 ディスカッション (コーディネーター: 土出郁子氏)

参加者数: 33 名

[目 次]

大図研関西3地域グループ合同例会 終了しました	...	1	
小特集: 大学図書館問題研究会 大阪地域グループ、京都地域グループ、東海地域グループ 共同開催「今話題の「岡山県の図書館・博物館」見学ツアー」参加報告	...	2	
瀬戸内市民図書館を見学して	藤野 まゆみ	...	2
オリーブが育つ庭 — 瀬戸内市民図書館をたずねて	藤本 由佳子	...	4
会費納入のお願い		...	6

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール: kyoto@daitoken.com (大学図書館問題研究会京都地域グループ)

URL: <http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

小特集:大学図書館問題研究会
大阪地域グループ、京都地域グループ、東海地域グループ共同開催
「今話題の「岡山県の図書館・博物館」見学ツアー」参加報告

瀬戸内市民図書館を見学して

藤野 まゆみ

【はじめに】

私は現在、大学図書館で勤務していますが、イベント開催や広報等、従来では公共図書館で行われていた利用者へのアプローチ手法が、近年、大学図書館でもさかんに取り入れられてきているように感じます。昨年11月に横浜の図書館総合展で行われたフォーラムの一つでも、大学図書館関係者であるパネリストから「図書館員はイベントであれ」という内容の発言があり、従来よりも更に利用者目線に落とし込んでの利用者サービスの構築、拡充を目指さなければならないという、利用者サービス業務に対しての大学図書館全体の意識の変化を改めて感じました。

そのような折に、今回の瀬戸内市民図書館見学会の案内をいただき、現在の公共図書館ではどのようなサービスが展開されているのかを知りたく、今回参加させていただきました。

【感想】

2016年11月13日(日)午後、現地にて集合後、瀬戸内市民図書館館長・嶋田様と図書館司書・横山様兩名より概要の説明があり、その後、館内を案内いただきました。今回は、特に印象に残ったことを、以下3点挙げさせていただきます。

①蔵書の見せ方

瀬戸内市民図書館では、NDC分類番号を前面に出して請求記号順に資料を排架するのではなく、書架ごとにテーマ(主題)が表示され、主題→請求記号順に排架されていました。TSUTAYA図書館等における独自の排架方式が登場する中で、同じ内容の本が同じ場所に集まりつつも、NDC分類に縛られず、特定の資料を求める利用者・ブラウジング目的の利用者・管理者(図書館職員)、三者に益のある排架ではないかという印象を受けました。今後の排架方法を考える上で、新しい指標になるのではないかと思います。

また、書架の段内の空きスペースには、特定の図書が面出しで排架されていました。段内に余白を作らないための配慮のようでしたが、圧迫感もなく、視覚的にも蔵書数が豊富であるという印象を受けました。

②図書館だからこそ出来るコーナーづくり

旅行ガイド本コーナーには、各都道府県から送付されてくる自治体関連のパンフレットやイベントのチラシ等を入れた既成ラックを数台併せて設置し、全国の地域情報コーナーとして展開されていました。自治体内外問わず多種多様な情報が集まりやすい公共施設としての強みが活かされており、市場に流通している図書だけを置いた、一般書店と大差ないコーナーづくりではなく、「ここに来ないと閲覧できない」「ここに来ればなんでも一括で閲覧することができる」ことが付加価値となって、良い意味で図書館と書店の差別化が出来ていると感じました。

③着眼点を変えての広報

一定範囲の固定スペースとして設けているギャラリーや展示コーナーもありましたが、館内の利用者の動線上のいくつかのポイントにミニ展示スペースを配置しており、限られた館内スペースで、いかに効果的に蔵書をアピールするか、利用者の視線・動きを意識しての配置である印象を受けました。

また、近年、大学図書館で導入されることが多いデジタルサイネージですが、瀬戸内市民図書館でも館内に設置されており、図書館の利用案内や地方自治体情報などの基本的なコンテンツが広報されていたほか、複数冊の新着図書の背表紙を撮影した画像データを取り込み、新着図書情報として広報されていました。新着図書の場、排架から貸し出されるまでの時間が短く、コーナーとして独立させると、書架収容率の割に日常的に排架されている冊数が少ないことが目立ってしまいますが、電子媒体化することにより、省スペース化に加え、貸出中の図書も含めての利用者への視覚的アピールへつなげておられたのが印象的でした（余談ですが、デジタルサイネージ付近には蔵書検索端末が設置されており、新着図書情報 → 蔵書検索 → 貸出中の場合は web 予約、という動線になっていました）。

このように、広報目的、広報の重要度等を精査し、普段の着眼点を変えて考えることで、一步踏み入った、より利用者目線の広報につながるのではないかと改めて感じました。

【最後に】

今回、瀬戸内市民図書館を見学させていただいて感じたことは、ハード面・ソフト面ともに、市民の要望・利益を考慮しながら、既存のものを有効活用し、新たに取り入れるものは取り入れ、不必要なものは廃棄するだけでなく再生して活かす、という感覚で運営されている図書館であるということです。図書館としてアピールしていきたいポイントと、利用者のニーズの把握を刷り合わせ、既存のサービスに落とし込むことで、いい形のサービスが展開されていると思いました。

見学を通じて得た、大学図書館の利用者サービス業務にも取り入れることのできるアイデアや視点など多くの気づきを、今後の自館の運営に活かし、サービス度合いの深化につなげていきたいと思えます。

末筆ですが、今回の見学会に参加させていただき、関係各位、また、オープンから間もない中、当日ご対応いただきました瀬戸内市民図書館・嶋田様、横山様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

ふじの まゆみ（立命館大学 図書館サービス課）

小特集:大学図書館問題研究会
**大阪地域グループ、京都地域グループ、東海地域グループ共同開催
「今話題の「岡山県の図書館・博物館」見学ツアー」参加報告**
オリーブが育つ庭 — 瀬戸内市民図書館をたずねて
藤本 由佳子

2016年11月13日、大学図書館問題研究会の企画で瀬戸内市民図書館を訪れた。市民が計画段階から参加し、そして完成した図書館は情報ニーズを「もちより・みつけ・わけあう」の言葉の頭を取って「もみわ広場」と名付けられた。開館前、人々の声を聴くべく開催されたワークショップは10回以上を数える。しかも、「すべての人の居場所としての広場」であると標榜していることから、子どもたちをも対象としたワークショップも開催され、新図書館の施設整備に活かされているという。全国の図書館関係者の注目を集め、視察に訪れる人も後を絶たないと聞き、遠方ながら楽しみに参加した。

同年6月に開館したばかりのその図書館は、大きな窓の向こうに庭の緑が楽しめる、吹き抜け構造の開放的な空間が印象的な建物だった。最も開けた1階の窓際は「せとうち発見の道」と呼ばれる展示スペースになっており、瀬戸内市に関する展示物が並べられ、本だけでなくモノからも学べるようになっていく。その他にも一階にはちょっとした打ち合わせにも使える飲食可能なカフェスペースや、読み聞かせなどが行われる「おはなしのへや」、4000点もの絵本があるという「えほんのコーナー」などがあり、あちらこちらから話し声や笑い声が聞こえる、少し賑やかなフロアとなっている。

2階は一転して静かだ。1階を見下ろすロフトのような佇まいで、傾斜した天井のせいか、木造ロジの屋根裏部屋に迷い込んだかのような感覚をおぼえる。にもかかわらず圧迫感と無縁なのは、差し込む自然光がやわらかに照らすからかもしれない。いわゆるムック本を中心とした趣味本や小説などが配される1階と異なり、2階は専門書も含む、利用者の「深く知りたい」に応える本が並ぶ。館長の案内を受け、書架を眺めていたその時、おやっと思った。基本はNDCをふまえた分類がなされているが、配架は必ずしも請求記号順にはなっていない。関連ジャンルが隣接して立ち並び、広がる疑問にも対応できるようになっているのだ。利用者はおそらく分類番号よりも、たとえば「遺伝と生命」「生き物の不思議」といった書架の見出し語に導かれて本を探すことが多いだろう。こうした見出し語は司書の方が設定されたという。これは資料について深い見識がないとできることではない。さらには利用する側の立場に立ち、興味がどのように展開していくかに意識を向けなければならない。しかもそれは個人の思いつきを排し、一般的に受け入れられるものでなくてはならない。もちろん、万人が納得することは難しいし、そもそも興味や関心は時代によって変化していくものであるため、柔軟に対応できる寛容さも必要となる。司書としての力量が問われる現場は、プレッシャーもあるだろうがやりがいに溢れていると感じた。

司書以外に、この瀬戸内市民図書館には学芸員も在籍されているそうだ。複数箇所ある展示エリアは、前述したように図書とモノによる複合的な学びの場になっており、それは専門職によって支えられている。博物館的役割も果たす図書館は、他にも県内の資料館や埋文センター、県立博物館などと共同して展示企画を実施されており、そうした

繋がりを生んだしなやかな考え方に感嘆した。ちょうどそのとき開催中の展示の案内を目にしたが、酒をテーマにしたものだった。農作、醸造、流通、饗応、神事、民俗、美術工芸、文学など、様々な分野で酒について連携展示する、ということで、切り口やアプローチの多様さは、パンフレットを読んだだけでも興味深い。またこの企画に関連して講演会やワークショップ、ワンコインでお酒が楽しめるイベントなどが開催され、図書館しか利用したことがなかった人が他の施設にも足を運ぶきっかけとして、非常に有用な手法だと感じた。

広く市民の意見が取り入れられ練られた計画だとしても、生かすも殺すも、それは実際に現場で働く人たちの力によるところが大きいと思う。プロフェッショナルが求められ、それに応えようと奮闘されている様子が、今回の訪問ではそこかしこに感じられた。提供する側でありながらも享受する側の立場にたつてあれこれ思考をめぐらすことは、まったく当たり前で実に簡単なことのようにだが、意外に実践されていないと感じることが多い。司書の方と懇談中、なかなか自席に着いていられない、というお話を聞いた。現在、瀬戸内市民図書館とは館種の異なる大学図書館に勤めているが、パソコンに向かっている時間が大半だからこそ、もっと閲覧フロアに出てみるべきだと感じた。書架から、あるいは利用者からさらに得るものがきっと多いはずで、色々と刺激を受けて考えを深めるいい機会となるに違いないだろう。

さいごに、企画して下さった大阪地域グループ、京都地域グループ、東海地域グループの皆様と、ご案内して下さった瀬戸内市民図書館の嶋田館長はじめ皆様方には、心よりお礼申し上げます。

ふじもと ゆかこ (同志社大学図書館学術情報課学術情報係)

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

2016/2017年度(2016年7月～2017年6月)より、大学図書館問題研究会会費は、すべての会員の皆さまに、直接大学図書館問題研究会事務局へご納入いただくこととなりました。

また、地域グループ(従来の支部)に所蔵される方は、地域グループ費と合わせてご納入いただくことになっています。

会費は、¥7,000(大図研会費：¥5,000+京都地域グループ費：¥2,000)です。

【振込先】

郵便局 00190-2-79769 大学図書館問題研究会

■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900 ■店番 019

■預金種目 当座 ■店名 〇一九(ゼロイチキューウ店) ■口座番号 0079769

ご不明な点は大学図書館問題研究会事務局(会費担当)(kaihi@daitoken.com)まで。

※ 学生会員制度(試行)として、学生の方には特典をお渡ししております。

詳細は京都地域グループ Web サイトの「学生会員制度の試行について」をご覧ください。